

児童養護施設における調理の場でのかかわりに関する事例的研究

児童養護施設 ユニット 調理の場
かかわり ケア

正会員 ○石垣 文 *1
同 菅野 實 *2
同 小野田泰明 *3
同 坂口 大洋 *4

1. 研究の背景と目的

近年、児童養護施設においては、大人数を一斉処遇する大舎型施設からケア単位の小規模化への動向がみられ、生活空間のユニット化や小舎化、居室の個室化等が挙げられる。その一方で食空間に関する基準はなく、各施設の取り組みに任されている。食事を共に調理し食べることは、子どもの精神的な安定や健康、自立への備え等の意味を持ち^{文1)}、調理場は「かかわりの場」としての重要性が指摘されている^{文2), 3)}。しかし、多くの施設では未だ「集団給食」が行われているのが現状である^{文2)}。そこで本研究では、ユニット型施設を対象に調理の場における子どもとスタッフのかかわりについて事例的に考察する。

2. 調査の概要

ユニットごとに調理・食事がなされるA園を対象に、生活場面への参与調査を行った(図1)。

3. A園における生活像

A園では、食堂、居間、和室の共有スペースが1日の生活の中心の場となる。学習は食卓や居間のテーブルで行われ、自由時間は和室や居間、台所で、遊びや読書、語らいやテレビ鑑賞などの行為が行われる。就寝時間を除いて、各自の部屋で過ごすことはあまりみられなかった。スタッフは、生活の流れにあわせてユニット内を移動するが、最も長く滞在するのは台所であった(図2)。

4. 調理の場における子どもとスタッフのかかわり

食事準備中のスタッフに対して、子どもは、スタッフの様子を見る、話しかける、手伝いをするなど様々な方法で日常的に関わりを持っていた(図3)。ヒアリングより、スタッフは台所にくる子どもの様子や頻度を、その子どもの状態を理解する目安としていることが分かった。さらに、台所でのかかわりをきっかけとしたケアを捉えた事例を一つあげる(図4)。ここでは、「共有の台所」「向かい合いでない姿勢」「作業(調理)を共有すること」「作業(調理)が生活集団にとって意味を持つ行為であること」がこのようなケアを支えていると考えられる。

5. まとめ

調理の場におけるかかわりは日常的に行われ、そこからスタッフが子どもの様子を図っていることが分かった。また、それらのかかわりのなかに子どもへのケアが埋め込まれている状況を把握できた。今後は、他の生活スペースに関して、その場とかかわりの特徴について考察していきたい。

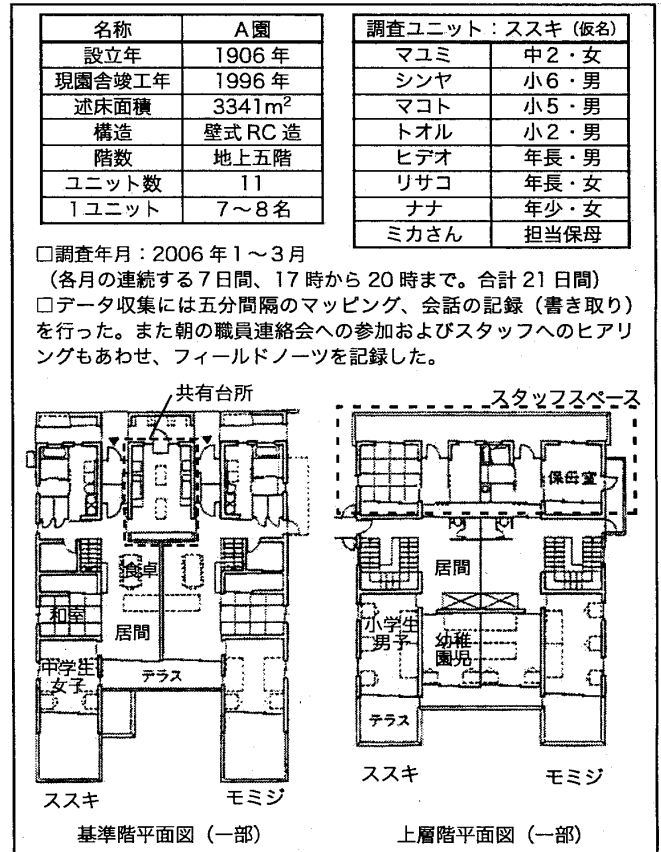


図1. 対象施設および調査の概要

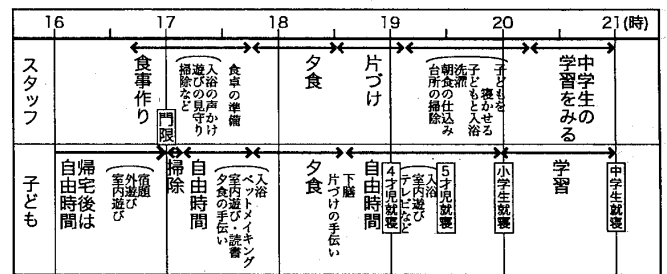


図2. おおよその日課

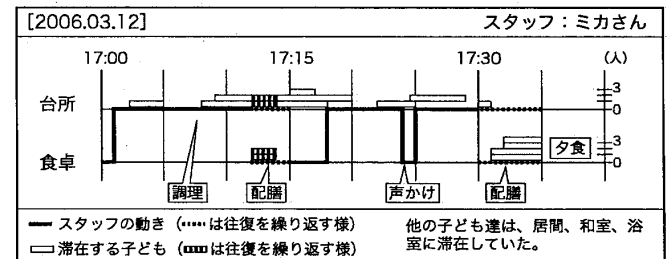


図3. 台所および食卓に滞在する子どもの人数の時間変化

Case Study of the communication at kitchen at Residential Care Facilities for children

ISHIGAKI Aya, KANNO Minoru,
ONODA Yasuaki, SAKAGUCHI Taiyo

<p>[事例1]</p>	<p>登場人物：マユミ、ミカさん（ススキ）、トシコ先生（モミジ）</p>	<p>調査日：2006.2.13-14 ヒアリング：2.15 ミカさん、3.14 トシコ先生</p>
<p>[scene1-1] 2月13日 学校でのトラブル □夕方：マユミは中学校で友達とトラブルがあった。夕方から部屋にこもり、ミカさんが呼びに行ったものの、夕食時にも部屋から出てこなかった。 □夕食後：7時過ぎ、マユミがお風呂からでると、ミカさんは幼稚園児を寝かせて二階から下りてきたところだった。ミカさんが「お風呂入ったんだ。ご飯たべる？」と聞く。マユミは頷き、2人は台所へ行った。食事の支度をするミカさんにマユミは後ろから抱きつき、話しをしていた。ミカさんが「おー、強くなった」と言う声が聞こえた。丁度、そのとき台所にきたトシコ先生にも、マユミは友達とのトラブルを話した。マユミはその後、食卓で夕飯をとりつつ、テレビを見ていた生活ボランティアのセイコさん、ミカさんと話をした（図a）。</p>		
<p>[scene1-2] 2月14日 朝の連絡会 「マユミは、ちょっとしたことでごちゃごちゃしています。落ち着きません」とトシコ先生から報告された。</p>		<p>図a. マユミの夕食時の部屋の様子</p>
<p>[scene1-3] 2月14日 夕食作り □夕方：調査員が16時半に部屋を訪ねると、台所ではミカさんがマユミと餃子をつくりながら、一方ではトオルの宿題を見ていた（図b）。マユミは調査員に「餃子作ってるの。」と笑顔で話した。17時20分くらいから、食卓で餃子を焼き始めた。マユミは「あちい、あちい」と言いつつも、ミカさんと笑いながらホットプレートに向かう。その様子をトオル、リサコが隣で笑いながら見つめていた。 □夕食時：この日のメニューは、餃子とカボチャの煮付け、ご飯とおみそ汁だった。マユミは自分が手伝いをしたこともあってか、カボチャが嫌いと言うシヤに対し、「トシコおばちゃんがつくったから、甘くて美味しいよ。」と勧めた。食事中に「おなががいっぱい」と言うマユミに、ミカさんは「料理するとお腹一杯になるんだよ。わかった。」と言った。マユミは笑って頷いた。この日は餃子を焼きながら食べたことや、会話がはずんだこともあり、食事は50分程と長くなった。マユミは「六時半からピアノだ」と立ち上がり、ミカさんも「そうだ。随分ゆっくり食べたね。」と答えていた。</p>		
<p>■考察 1. 状況の認識：スタッフは、マユミの学校でのトラブルを把握すると同時に、マユミの落ち着かない様子も目にし、スタッフの会議でも報告された。 2. 話すということ：子どもにとって、自分の状況や感情、経験を人に話すということが大切である。マユミの場合は「動きながら話しをした方がいい」タイプである^{註1)}。 3. 調理を通じたケア：14日はミカさんはナナの通院に付き添い、帰宅が遅くなっていた。マユミはいつもより早く帰宅していたため、トシコ先生がマユミを夕食の支度に誘い、話しを聞くことにした。トシコ先生は、調理をするという動きを加えつつ、また料理の話し加えながらも、背中合わせで「どう、最近学校。」「ミカさん、心配してたよ」などと切り出してマユミの話しを聞いた。同時にここには、食事作りを通じて褒められることによって、マユミに自信をつけさせたいというトシコ先生の意図があったことも確認された。 4. ケアの誘発：ミカさんは、「結果的に、マユミと2人の時間が多くとれました。」と話していたが、これは偶然に発生したケアというよりは、調理という行為自体が、ケアのきっかけを誘発する可能性を包んでいると考えられる。さらにここでは、ユニットを越えたスタッフ同士の連携、共有台所空間や食卓での会話等が効果的に働き、マユミの落ち着きへつながったと考えることができる。</p>		<p>図c. 台所</p> <p>註1) 「じっくり話しをするときは止まった方がいい。けれどマユミの場合は動きながら話した方が、感情に落ち込まないですむ。」(2006.3.14 ヒアリングより)</p>

図4. 調理を通じたケア事例

註) 本研究では、スタッフと子どものコミュニケーションを「かわり」、その中でも特に子どもの抱える問題の解決を目的としたものを「ケア」とした。

参考文献 1) 庄司順一ら：グループホームの現状と課題1、日本子

も家庭総合研究所紀要第39集、2002 2) 季刊「児童養護」Vol.32 No.2,2001 3) 石垣文、菅野賢、小野田泰明、坂口大洋：情緒障害児への環境療法の展開にみる小舎型施設空間の意味、日本建築学会計画系論文集 No582、p17-23、2004.08

- *1 東北大学大学院工学研究科 工修
- *2 東京電機大学情報環境学部 客員教授 工博
- *3 東北大学大学院工学研究科 助教授・博士(工学)
- *4 東北大学大学院工学研究科 助手・博士(工学)

- Graduate School of Engineering, Tohoku University, M.Eng.
- Visiting Prof., Tokyo Denki University, School of Info. Envir. Dr.Eng.
- Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Tohoku University, Dr.Eng.
- Research Assoc., Graduate School of Engineering, Tohoku University, Dr.Eng.